

# J・クリシュナムルティの人間形成

——思想形成に到る背景の一考察——

小林 一 正

はじめに

- 一、クリシュナムルティの根本的主張
- 二、クリシュナムルティの生い立ち
  - 1、クリシュナムルティの父
  - 2、クリシュナムルティの母
  - 3、クリシュナムルティの弟
  - 4、幼少期のクリシュナムルティ
- 三、神秘体験までのクリシュナムルティ
  - 1、発見されて渡欧するまで
  - 2、ヨーロッパ遊学時代
- 四、人生の転機
  - 1、神秘体験とプロセス
    - a、神秘体験に到るまで
    - b、ヨーギとしてのクリシュナムルティ
    - c、神秘体験とプロセス
  - 2、弟ニトヤの死

五、結論

- 1、ニトヤ死後のクリシュナムルティ
- 2、クリシュナムルティの人間形成に及ぼした要因
- 3、人生の転機となった出来事

はじめに

ジッドゥ・クリシュナムルティ (Jiddu Krishnamurti, 1895・5~1986・2) は、「人間が真に生きていく根源の世界に目覚めようとし、ついに遂行し、いかなる妥協をも排し、すべての伝統を否定し、ほとんど意のままにその世界を実現することができたと思われる」人物である。<sup>(1)</sup> 彼の人間形成とその活動に決定的な影響を与えているのは、何と言っても一九二二年八月、二七歳の時の神秘体験<sup>(2)</sup>であることには間違いないと思われるし、この神秘体験を踏まえて語っていることは確かである。

あるので、クリシュナムルティ自身好みには添わないが、彼をインドの神秘家として捉えておきたい。

ところでこのクリシュナムルティには他のインドの思想家・神秘家たちと著しく異なる点がある。それは①一切の伝統及び諸観念からの解放②現代的問題への関心③科学との関係の三点である。

写真を見れば分るが、彼は美男子であり、スター的存在であつたようである。欧米では王侯貴族から金持ちに至る上流階級の信奉者も多いようであるが、出版された著作に現われる彼の対話の相手・講話の聴衆はバラエティに富んでいたと思われる。クリシュナムルティは「人間が真に生きていく根源の世界」を指し示し、そこから語り、そこに生きることを勧め、彼に聴こうとする人々に常にインパクトを与えて止まないのである。従つて各自の置かれてある立場からクリシュナムルティに聴き、問い、探求し、研究することが可能であると言えよう。インドや欧米ではかなり知られておりながら、日本における彼の紹介や研究は最近になって始まつたばかりであるというのが現状ではなからうか。

## 一、クリシュナムルティの根本的主張

クリシュナムルティの活動の範囲は広く、期間も長い。さらに彼の関心は多岐にわたり、著作等の資料は膨大となり、

J・クリシュナムルティの人間形成（小林）

クリシュナムルティ研究は樹海に迷い込む感さえある。しかし「その根本的な思想はきわめて単純である」ところが「必ずしも明快であるとはいえない」。それでは一体彼自身の「根本的立場は何であらうか。それは一語にして言うならば、次の如くである。ありのままを経験し、経験したままを観察する、それによつて本能的かつ自然的に分断されている人間の根本的見解を全体の世界に復帰せしめようとするのである。それがすなわち、すべての過去に死してただ現在のみに生きることであり、真の創造であるという。クリシュナの立場を思想的に表明すれば、この一節に尽くされているということが出来る」のである。

さらに文字通りこれを一言でクリシュナムルティの用語で言うならば *Choiceless Awareness* (無<sup>(8)</sup>択<sup>(8)</sup>の覚) ということになるであらう。

## 二、クリシュナムルティの生い立ち<sup>(9)</sup>

クリシュナムルティの思想を理解するためには、彼の人間形成の過程を知ることが非常に重要である。何故なら「とくにかれの場合は、思想と人間とは不可分離であり、思想がそのまま人間としての生きざまを示している」<sup>(10)</sup> からである。

### 1 クリシュナムルティの父

父ナラニアに注目すべきことは、彼がバラモンの家系であるということ、一八八一年から神智学協会の会員であったことの二点である。父親が神智学協会に入り、退職後同協会本部に再就職しその近くに住んだことにより、クリシュナムルティは同協会より発見される直接のきっかけとなったのであった。発見されることなく終ったら、彼は全く別の人生を歩んだことであろう。

父が大英帝国統治下の税務に関係した公務員であったことは、クリシュナムルティにさほど重要な影響を与えたとは思えない。あるとすれば、多忙の故に子供たちの世話がより多く母親に任されたことと、アディヤルに來る以前父親の転勤に伴って何度も転校を余儀なくされたことであろう。

バラモンとしての出自の意識が少くとも表面になかったことは確かであるが、その深層意識あるいは血の中に消し去ることのできない刻印としてなかったとは言い切れないのではないだろうか。

## 2 クリシュナムルティの母

Sanjevamma

母であるサンジューヴァンマは一八九五年五月十二日午前十二時三十分真夜中に自宅にある礼拝室<sup>アディヤル・ルーム</sup>で八人目の子クリシュナムルティを産んだ。翌朝その地方では著名な占星術師に占ってもらうと、多くの困難に出会うが偉大な教師にな

る、という結果が出たという。以後クリシュナムルティはバラモン家庭の伝統的な儀礼を経ながら、信心深く情け深い母親の下で成長したのであった。

ここで母親に注目すべきは彼女の霊能者としての素質である。彼女は霊媒<sup>サイキック</sup>であったと考えられており、また幻視<sup>ビジョン</sup>を見、人間から発するオーラの色を見ることができたということである。さらに注目すべきは、この母親の霊媒<sup>サイキック</sup>の素質をクリシュナムルティがそっくり受け継いでいることである。

彼は「我が生涯の五〇年史」という題で自伝を書き始めたがすぐに断念してしまった。幼年時代について書いた原稿は残っており、それによると母は礼拝室<sup>アディヤル・ルーム</sup>で規則正しく礼拝していた。そこにはインドの神々の像があり、虎皮を敷いた壇<sup>ナヨウキ</sup>に結跏趺坐をしてインド服を纏ったベサント夫人<sup>Mrs. Annie Besant</sup>の写真もあった。ここでベサント夫人のことや業・輪廻の話聞き、マハーバーラタやラーマーヤナやその他のインドの聖典を<sup>サイキック</sup>読んでもらったのであった。

霊媒<sup>サイキック</sup>でもあった母は数年前に死んだクリシュナムルティの姉をしばしば見たという。庭には姉がよく現われる場所があり、母に見えるだろうと言われ、最初は笑っていたクリシュナムルティだったが、後には彼にも見えるようになったという。また母のように彼も時々オーラを見たという。さらに母の死後、しばしば彼女を見たということである。

この母は彼が十歳（一九〇五年）の時に亡くなるが、彼に与えた影響は決して小さなものではなく、本人もその点は認められているのである。<sup>(11)</sup>

### 3 クリシュナムルティの弟

彼の兄弟は合計すると十一人になるが、そのうち六人しか生き残らなかったようであり、伝記に名前が出てくるのは弟（三歳下）のニトヤナンダ<sup>Nityananda</sup>だけである。彼は生れつきクリシュナムルティとは全く違い、ずばぬけて聡明な子であった。言葉もままならぬ頃から他の子供たちが学校へ行くのを見ると、彼も石版をかかえて彼らの後を追ったという。

このニトヤは常に兄のクリシュナムルティと行動を、苦楽を共にしたのであった。異国で共に孤独を味わい、共に笑い、共に夢を語り会ったのであり、兄の欠けを補い、兄は弟なしに自分を考えられないほどであった。従ってこの弟の死はクリシュナムルティにとって尋常でない悲しみをもたらしたが、立ち直った時に彼は、今も弟と自分は一心<sup>ワン</sup>同体で、彼と共に働くつもりだ、何故なら自分と弟とは一つであるからだ<sup>ワン</sup>と述べているくらいである。この兄弟の絆の深さはいくらか強調してもしきれぬものがあると言えよう。

この弟ニトヤの死を、神智学協会のマスターたちは止める<sup>とど</sup>ことができなかった。クリシュナムルティ自身は一切言及し

ていないが、これ以後、彼はマスターたちの存在を否定し、彼らの教えに基づく神智学にも背を向けたとみて間違いないと思われる。それまで彼を条件<sup>condition</sup>づけているものを、条件づけているが故に彼のそれまでの存在<sup>存在</sup>理由<sup>理由</sup>さえも否定するに至るのである。つまり、ニトヤの死はクリシュナムルティの歩みに重大な転機<sup>転機</sup>をもたらすことになるのである。

### 4、幼少期のクリシュナムルティ

彼の母に対する想い出は楽しいもの懐かしいものであったが、学校生活に対してはそうではなかった。彼は弟のような聡明さからは程遠く、しかも病弱で丸一年学校へ行けなかったこともあった。学校にも勉強にも興味を示さなかったが、雲や蜂や蟻や他の昆虫を長時間眺めていたり、遠くをいつまでも見ていることがあった。当然教師には知的には遅れていると誤解<sup>誤解</sup>されていた。<sup>(12)</sup>しかし機械<sup>メカ</sup>類には異常に強い関心を示し、ある時などは学校へも行かず部屋にとじこもり、食事もせずに時計の動く仕組を納得するまでバラしたり組み立てたりしていじっていたという。

### 三、神秘体験までのクリシュナムルティ

#### 1、発見されて渡欧するまで

一八九九年にベサント夫人はアディヤルで「アヴァターラ」と題して講演している。そして一九〇八年のアメリカ旅行中に、しきりに世界教師の到来の間近いことを述べている。クリシュナムルティの父ナラニアはこの年に退職し、ベサント夫人に就職の依頼をしたのであった。

この頃透視能力のあるリード・ビーターは、いつものように水浴して遊んでいる子供たちの中に、たまたまクリシュナムルティを見出し出したのであった。リードビーターは彼から著しいオーラの出ているのを見たからである。この後クリシュナムルティとニトヤは父親の了解の下に、神智学協会で教育されることになったのであった。

かくして将来の世界教師あるいはロード・マイトレーヤと呼ばれる神智学協会の救世主の来臨の際の器としての備えのための教育及び訓練がリードビーターの指導監督の下に始まったのであるが、何故かこの教育及び訓練は極力インド的なものを排除し、イギリス紳士となることをめざしていた。フオークやスプーンの使い方などから衣服の着方・靴のみがき方に至るまで、イギリス人のようになることが要求されたのであった。言葉は勿論英語のみであった。従って次第に母語であるテルグ語は忘れ、子供時代に覚えたヴェーダの言葉も拭い去られていった。すべてが計画的組織的に、しかも厳格に行われたのであった。

ベサント夫人は一九〇九年十一月二七日に初めてクリシュナムルティに会った。彼女は彼とニトヤの後見人となり、除々に彼の回りに保護の壁を建て始めるのであった。彼と遊ばせるために特別に少年たちのグループが選ばれたが、彼の坐るイスには誰も坐れず、彼のテニスラケットは本人以外誰も使えないというふうであり、彼の行動はすべて注意深く見守られていた。

クリシュナムルティは信心深い母親のいる家庭で幼少のクリシュナ神を見ていたのであったが、今度は神智学協会の言うところのマスターたちやブツダを見るようになったのであった。協会本部にあるエソテリック・セクションの瞑想ホールにはマスターたちやマハトマたちの肖像が掲げられており、彼らの名前と顔とをクリシュナムルティの日々の現実と融合させ、一つにすることに没頭していたのである。

クリシュナムルティに出会って間もなくベサント夫人はベナレスへ向った。ベサント夫人とクリシュナムルティとの母子関係のような親しさの基礎は、この期間に作られたようである。クリシュナムルティはリードビーターに発見されてから五ヶ月後の一九一〇年一月十一日には第一秘伝を受けたという。これは神智学協会における心霊的な体験で、クリシュナムルティの靈魂が肉体を離れ、マスターたちのところへ行き、彼らから直接教えを受けたと言われるものである。<sup>(14)</sup>

<sup>(13)</sup> The Initiation

<sup>(14)</sup>

## 2、ヨーロッパ遊学時代

一九一一年ベサント夫人はクリシュナムルティ兄弟を連れてイギリスへ渡った。神智学協会には対立抗争と分裂はつきものであった<sup>(15)</sup>ようであるが、この頃協会内部でベサント夫人がクリシュナムルティを来るべきメシヤの器として選んだことに対する批判が起っている。しかし、彼がマイトレーヤ・ブッダ(Mesha)の器となるべき人物であるというベサント夫人の確信は毫もゆらぐことはなかった。

この年十二月に一度インドに帰り、翌年一九一二年にベサント夫人は、オックスフォード大学の入学に備えさせるために二人をイギリスへ連れて行った。この途中イタリアのタオ<sup>Taoro</sup>ルミナに立ち寄った。ここにはリードビーターが待つており、クリシュナムルティに第二秘伝を受けさせるためであった。<sup>the second initiation</sup>

ベサント夫人はすぐにまたインドへ戻るが、クリシュナムルティ兄弟は一九二二年までは戻らず、ヨーロッパにとどまるのである。ベサント夫人にクリシュナムルティは毎週手紙を書き、ベサント夫人は手紙を通して彼らを指導するのであった。

最初は学校へも行っていたがいじめに会ったりし、結局彼らは家庭教師の下で学んだのである。やがて一九一四年には第一

J・クリシュナムルティの人間形成(小林)

次世界大戦が始まった。インド人部隊はイギリスのために戦っていたが、イギリス人のインド人への人種的偏見はひどく、この戦時下に労働奉仕をしたいと二人は強く願ったが、病院の床磨きがせいぜいで、それも束の間のことであった。インド人故に周囲に受け入れられないことを、クリシュナムルティはベサント夫人にしきりに訴えるのだった。寂しく不愉快な生活を送り、全く疎外されていると感じていたのである。幻滅さは募るばかりで、神智学の教えにも興味を失ったかのように見えるのであった。

その後受験勉強に専念するが、結局はどこにも受からず、戦争後パリへ行って勉学を続けるのであった。

ヨーロッパへ来る以前には、クリシュナムルティはマスターたちと生きた連絡を取り合っていたが、イギリスへ行ってからは懐疑的になり、如何なるエソテリックな活動にも興味をほとんど示さなくなっていた。しかし、一九二一年十二月にインドに帰り、家族や親族や友人たちと再会するとともに、マスターたちとの交流も再び始まるのであった。

### a 神秘体験に到るまで

一九二二年兄弟はカルフォルニアのサンタ・バーバラに近<sup>Ojai</sup>いオジヤイにやって来た。この土地は後にベサント夫人が二人のために購入し、アーリア・ヴィハラ<sup>Arya Vihara</sup>と名付けるので

ある。

クリシュナムルティはここで毎朝規則正しく瞑想し始めており、心が容易に反応するのに自分でも驚いている。一日中意識の中にマイトレーヤのイメージを保つことができ、心はますます穏かになり、鎮まっていた。人生に関する彼の全体の見通しは変わりつつあった。どのドラも内側に向って開きつつあったのである。いよいよこの年の八月に、人生のコースを変えることになる重大な霊的覚醒に、彼は突入することになるのである。

b、ヨーギとしてのクリシュナムルティ

インドの宗教的伝統の中で、意識の迷路を探求しているヨーギはクンダリニKundalini（各自にとぐろを巻いている霊的エネルギー）と心霊的現象の全く新しい領域を爆発させ、心の未知の分野を旅しながら覚醒していくのである。この根源的エネルギーに触れ、神秘的なイニエーション儀を体験するヨーギは、敏感で傷つきやすく、極度に危険だと思われる。肉体と心は狂気か死につながるかもしれない危険にさらされているのである。ヨーギは秘密の教義ドクトリンを学び、宗教的指導者（グル）の指導の下に、眠れるエネルギーを覚醒させる体験をするのである。意識の舞台におけるこの変革は、神秘的なドラマとして表現されるのである。肉体と心は極端に危険な旅をしなければ

ばならない。熟練者は弟子たちに取り巻かれ、守られており、周囲は神秘に包まれ、沈黙によって安全に守られているかのような雰囲気なのである。

クリシュナムルティの神秘体験の場はアメリカであつても、彼の体験はどこまでもインド文化の枠組の中での出来事であつたのである。

c、神秘体験とプロセス

クリシュナムルティの神秘体験の内容は一言で言えば、見えるもの全てが自分であるというものと、主ブツダロードや主マイトレーヤ、マスターKHを見るといふものであつた。さらに特徴的なのはこの前後に激痛を伴った肉体的な現象（後にプロセスProcessと呼ばれる）があることである。これは継続的にあるいは断続的に、強烈にあるいは穏やかに、生涯続くのである。<sup>(17)</sup>

第三者から見れば錯乱状態としか言えず、また本人には激痛を伴ったこのプロセスは翌年の十一月頃までには一応静まるのであつた。この間何回となく母親が登場する。夜中に何回も母を呼び、「ニトヤ、お前に彼女が見えるか？」と言ひ、正気に戻った時、幼少時代を想い出し、幼少期の体験を再体験していたのだと話したという。以後時々母親の名を呼んだり、またニトヤと共にクリシュナムルティの世話をしていたRosalingdと母のイメージを重ねて、彼女が母親であるかの

ように話しかけたりしている。この時の彼は幼少の彼に戻っているのである。

一九二四年に親しい何人かの人々と旅行をしているが、その時もこのプロセス体験は続き、この時は主とマスターザ・ロードを見ている。この様子をベサント夫人に書き送ったニトヤの手紙の記述は、主ザ・ロードの幻を除けば残りはクンダリニの覚醒の古典的な表現であるとジャヤカルは言及している。

## 2、弟ニトヤの死

ニトヤの病気は一向に回復せず悪くなる一方であったが、クリシュナムルティは彼をマスターたちの守りに委ねて、ヨーロッパに向った。この少し前にベサント夫人は神智学協会の活動方針として最終秘伝を受けた人々の指導体制と新世界宗教と新世界大学の三つを公表していた。クリシュナムルティはこれを受け入れず、老齢のベサント夫人はショックを受けたが、世界教師としての彼に対する全き信頼や彼女の活動に影響することはなかった。

一九二五年十一月、ベサント夫人はじめ多数が神智学協会創立五十周年大会のためにアディヤルに向った。クリシュナムルティのマスターたちへの信頼に疑いはなかった。二月に書かれたクリシュナムルティのベサント夫人当ての手紙には、夢でマスターたちやマイトレイヤール等を訪れ、ニトヤ

の病気の回復を頼んだが、その返事はニトヤが良くなるというものであり、彼の不安は消えた、とあるのである。このようにマスターたちに直接会えたことによって、The Great Being 大いなる存在者の力がニトヤの生命を長くして下さるのだ、と確信したのであった。

しかし、クリシュナムルティのマスターたちとの連絡や彼らの現マニフェステーションわれ方を見ると、それらはすべて幻視ヴィジョンであり、夢の中の出来事であったことは明らかである。幼少の頃も彼はそうしたことは体験していたし、リードビーターの指導を受けるようになったのは自然にマスターたちの姿を見るようになったのである。ベサント夫人への手紙の中にも、またオジヤイにおける神秘体験の中にも、さらにその後にもそれは迎えることができるのである。後に彼は、すべてのイメージや現われは、それがどんなに深いものであっても人間の心の投影である、と言うようになるのであるが、最初の頃の彼は夢と醒めている状態とを厳格には区別しておらず、同じ現実性があったのである。

ニトヤの死と爆発するような悲しみによって現実と直面し、マスターたちへのフィジカルな言及は終わったのであった。

## 五、結論

1、ニトヤ死後のクリシュナムルティ

しばらくは全く悲しみに打拉ひがれていたクリシュナムルティもほどなく立ち直ったが、それはもう以前の彼ではなかった。直接的にマスターたちの存在を否定したり、神智学の教義に異を唱えたりすることはなかったが、神智学協会の如何なる権威も、教義も、エソテリックな方法も認めず、完全な自由を求め、自由に語り始めたのである。<sup>(18)</sup>そしてついに自らが長であり、世界教師の活動という自らのために設立されたThe Order of the Star in the East(6)には神智学協会をも脱会するのである。

2、クリシュナムルティの人間形成に及ぼした要因

Kの人間形成の基本的な部分は、神智学協会によって発見され、教育や訓練を受ける以前の幼少期に既に形成されていたと言えるであろう。父親がバラモンの家系であったことと神智学協会の会員であったという外的な要因と、母親の靈能サイキック者の素質と家庭教育という内的な要因によって形成されたと言えるのである。

インドの神秘家や思想家にない特徴として玉城博士が①伝統及び諸観念からの解放②現代的諸課題の考察③科学との関係という三点を挙げておられることは最初に述べたが、この

ような人物として形成されていった遠因は次のように考えられないであろうか。

まず①と②についてであるが、これはクリシュナムルティが神智学協会の中で育ったということと、また彼がここから出たということとで理解できると思われる。

彼は人里離れた場所ですら修行にいそしんだ訳ではなく、ヨーロッパで長期間教育を受け、視野を広め、様々の体験をしたのであったが、このことが彼の活動範囲の広さと興味関心の広がりへの準備になったと考えられる。また神智学協会を出た、ということとは、ここで抛り所となっていた教養や権威をはじめ、生活基盤等あらゆる条件づけを否定し、全く独自に、全く自由に歩み出したことを意味していると考えられるのである。

クリシュナムルティがバラモンの生れ育ちであるという点に関して、もう一つここで述べておきたい。

鈴木大拙はクリシュナムルティに二回ほどしか直接には会っていないが、「彼はいつも高いところから語っており、自らはお金にも触れず、手を汚さず、泥に少しもまみれていない。」という内容の感想を漏らしたことがあるという。クリシュナムルティの表現には禅的なところがあり、回りの人に彼について度々問われることもあったので、大拙も彼の著作を何冊か読んでいた<sup>(20)</sup>という。

このような鈴木大拙のクリシュナムルティに対して持った感じあるいは感想は、多少とも禅に触れ、クリシュナムルティの著作に触れてみるならば同じように持つのではなからうか。このように感じさせる遠因は彼のバラモンとしての出自にあるのではなからうか。さらにもう一つ考えられることは、十四歳という若年の時から神智学協会において救世主・世界教師として特別な保護と扱いの下に長期間育てられたということである。神智学協会の集会で少年クリシュナムルティが出て来ると全員起立し最敬礼しなければならなかったという。当然シュタイナーやジュヴァイツァーのように神智学協会を出ていくのもでてきたのである。(21)

### 3、人生の転機となった出来事

父親が準備した神智学協会という土壌の中に、母親から受けついで<sup>サウキック</sup>霊能者の素質の種が花開いたのがクリシュナムルティであったと言えよう。協会内で彼はオカルト的<sup>the Occult hierarchy</sup>な霊的階位<sup>the first initiation</sup>を登らされていたのであった。第一 秘伝<sup>the second initiation</sup>とその階位を登りつめていったのであるが、これは何も彼一人ではなく、協会内で素質のある者は誰でも登っていくのである。第一回、第二回のイニシエーションを玉城博士はクリシュナムルティの第一回の精神的転機、第二回の精神的転機としている。特に第一回目の体験はその後の生涯におけ

J・クリシュナムルティの人間形成(小林)

る基本的な方向を決定したにちがいないとまで述べておられる。(22)

しかし、クリシュナムルティが神智学協会で咲かせた花は徒花にすぎなかったのではないだろうか。彼は神智学的オカルト的なもの一切と訣別し、絶対自由の道を歩み出したのであるが、その転機こそ既にみてきた如く一九二二年八月の神秘体験と弟とニトヤの死であると思われるのである。

#### 注

(1) 玉城康四郎「ジッドゥ・クリシュナムルティの根本問題」『印度学仏教学研究』、昭和六十二年三月、第三十五卷第二号)五〇二頁。以下、玉城「根本問題」と略記。

(2) 玉城康四郎「クリシュナムルティの人間に関する精神分析」(日本大学哲学研究室、『精神科学』二四号)以下、玉城「精神分析」と略記。

ここにクリシュナムルティの神秘体験の内容の紹介と分析が載っている。

(3) 玉城「根本問題」、五〇二頁。

(4) Pupul Jayakar: Krishnamurti, A Biography, Harper & Row, 1986 以下「伝記」と略記。本書に興味深くまた貴重な写真が多数載っている。

なお本書は鈴木大拙の秘書をされていた別宮美穂子氏(旧姓岡村)より貸与されたものである。さらに別宮氏からは一九八七年八月の「禅と基督教懇談会」において、またその後においてもクリシュナムルティに関わる事でいろいろと御教示

いただいたことを、感謝とともに記しておきたい。

(5) 別宮氏の御教示による。

(6) 玉城康四郎「クリシュナムルティにおける人間」(前田専学編『東洋における人間館』所収、東京大学出版会、未刊)、二〇二頁。以下、玉城「クリシュナムルティにおける人間」と略記。

(7) 玉城「根本問題」五〇三頁。

(8) R. K. Shringy: *Philosophy of J. Krishnamurti: A Systematic Study*, Manshiram Manohalal Publishers, 1977, p. 146 ff.

(9) クリシュナムルティの略歴は玉城博士の諸論文及び各種邦訳書に Mery Lutyens の伝記に基づいて紹介されているので、ここではそれとの重複は極力避け、ジャヤカル「伝記」(七九頁まで)に従って述べることにする。細かく参照箇所を明示することは省略する。

(10) 玉城「クリシュナムルティにおける人間」、二〇三頁。

(11) Cf. J. Krishnamurti: *Early Writings*, vol. 1, Chetana, p. 61.

(12) 宮内訳「クリシュナムルティの日記」(めるくまーる) 八三〜八四頁参照。

(13) 正体不明としか言いようがない人物。実在していたとは筆者には思われない。

(14) 玉城「クリシュナムルティにおける人間」、二二六〜二二八頁。

(15) 高橋・荒俣著「神秘学オデッセイ——精神史の解説」(平

河出版社)、一一〇〜一二二頁参照。

(16) 玉城「精神分析」、及び大野訳「生と覚醒のコメンタリー」(II)(春秋社、三八一頁以下)を参照。

(17) 「クリシュナムルティの神秘体験」(おおえ訳、めるくまーる)参照。

(18) J. Krishnamurti: *Early Writings*, vol. I~III, 一九二六〜三〇までの講話対話を参照。

(19) 「クリシュナムルティの瞑想録」(大野訳、平河出版社)二五八頁以下に「星の教団解散宣言」が載っている。

(20) 別宮氏の御教示による。

クリシュナムルティ鈴木大拙との直接の出会いは一九五一年の冬に一回ニューヨークにおいてと、それ以前に少なくとも一回は出会っていることは確かであるが、それ以前のことには別宮氏にも分らないとのことである。

(21) 高橋・荒俣前掲書、二二二〜四頁参照。

(22) 玉城「クリシュナムルティにおける人間」、二二八頁。

補注(邦訳書一覧)

「道徳教育を超えて」、「自由への道」、「自己変革の方法」(以上叢書「叢書」)、「自我の終焉」(篠崎書林)

「クリシュナムルティの瞑想録」、「生の全体性」(以上平河出版社)、「暴力からの解放」、「英知の探求」(以上たま出版)、「クリシュナムルティの日記」、「真理の種子」、「クリシュナムルティの神秘体験」(以上めるくまーる)、「生と覚醒のコメンタリー」(I~IV)(以上春秋社)